少年少女

世界の名作

フランス編—7

十五少年漂流記

ほか

小学館

◈NDC 909　小学館版　362p　24.7cm

ワイドカラー版
少年少女世界の名作／26巻／フランス編7
にんじん／きつね物語／モーパッサン短編
科学物語／キュリー夫人／十五少年漂流記

昭和47年3月25日　初版第1刷発行

編集著作権所有・発行者　相賀徹夫
東京都千代田区一ツ橋2-3-1

印刷所　大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町1-12

本文用紙　本州製紙株式会社

表紙Sペラン　特種製紙株式会社

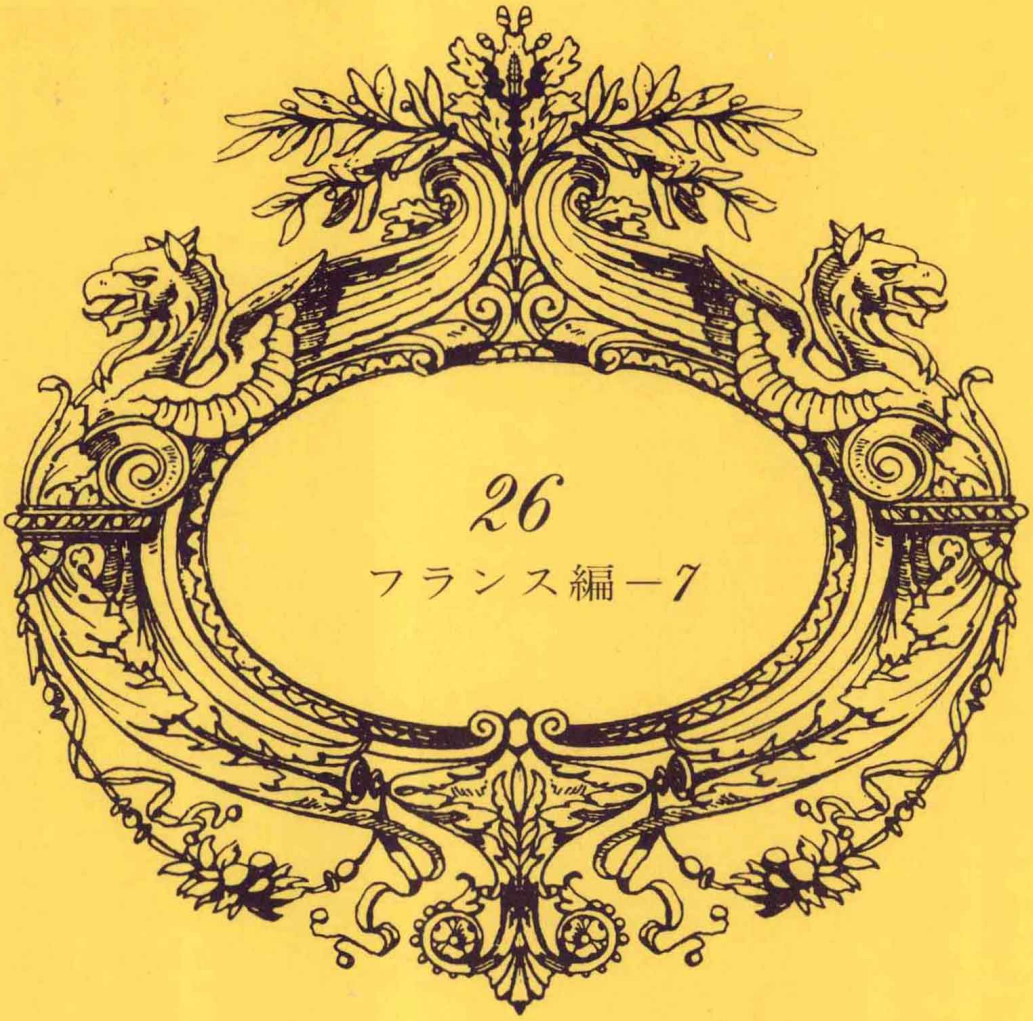
発行所　株式会社　小学館
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
〔郵便番号〕101〔振替〕東京 200
〔電話番号〕東京03-263-2111

造本には十分注意しておりますが、万一落丁、乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

©1972　株式会社　小学館　Printed in Japan

少年少女

世界の名作



Poil de Carott

にんじん

ルナール原作

Marie S Curce

キュリー夫人

Deux Ans de Vacances

十五少年漂流記

ベルヌ原作

ほか

きつね物語

寺院にもぐりこみ、祭だんの前で酒もりをするきつねのルナールとおおかみのプリモー。「ころもだ！　頭をそれ！」と、ルナールの悪だくみともしらずに、いい気分でおおさわぎのプリモー。

132ページをごらんください。

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com

島に向かって、ひっしにかじをとる、ブリアンたち。あれくるう海、ふきすさぶ風。はたして少年たちはこの困難を、無事のりきれるだろうか……。

245ページをごらんください。

十五少年漂流記

キュリー夫人

マリーとピエールは、そっとドアをあけた。暗いへやの中に、ぼうっと光るもの……。『ラジウムだ！　ああなんて美しい光……。』ふたりは、手をにぎりあった。

232ページをごらんください。

少年少女

世界の名作／26　フランス編7

もくじ

にんじん

にわとり……12
犬のピラム……15
こわいゆめ……18
白いつぼ……20
銃……27
湯飲み……30
水泳……32
アガート……36
日課……38

ルナール作
奈街三郎文……11

元旦……42
行きと帰り……45
ペン……48
にんじんと父親の手紙……51
小屋……56
名づけ親……57
泉……60
すもも……62
小さな花よめ……65

名作シンボルマーク
世界の名作文学
ノンフィクション
科学（自然社会）名著
伝記

金庫……68
おたまじゃくし……72
思いがけない事件……75
かり場で……76
は　え……80
最初の山しぎ……81
つり針……82
銀貨……87
反抗……93
終わりのことば……96
読書ノート……野田一郎……101
井上明子　文……105

きつね物語

第一話　きつねとおんどり……106
第二話　きつねとおおかみと　ベーコン……112
第三話　さかな屋をだました　きつね……117
第四話　はげにされたおおかみ……122
第五話　きつねとおおかみの　さかなつり……125
第六話　きつねとぼうさん……130
第七話　いどに落ちたきつねと　おおかみ……135
第八話　きつねの心ぞうが　止まった……144
読書ノート……石川二三子……150

「科学物語」より　かみなり

ファーブル作　西原康文……153
読書ノート……松尾桂一……172

モーパッサン短編

モーパッサン作 内野富男文……175

首かざり……176

めぐりあい……188

読書ノート……飯田均……195

キュリー夫人

槇本ナナ子文……197

一、ごめんなさいおねえさん……198

二、悲しいポーランド……200

三、帰らない人……204

四、くやしい日……206

五、神さまにお願いしたのに……210

六、忘れられないできごと……212

七、美しいやくそく……215

八、遠い村に来て……218

九、あこがれのパリの大学……222

十、どんなに貧ぼうでも……227

十一、ふしぎな青白い光……229

十二、人びとのしあわせのために……232

読書ノート……清水敏伯……236

十五少年漂流記

ベルヌ作 花岡大学文……239

第一部 無人島の探検

（一） ただよう船……240

（二） 大波と戦って……248

（三） わけのわからぬ出港……253

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

（四）上陸第一歩……258
（五）みさきの探検……265
（六）海がめ退治……271
（七）大きな湖……273
（八）ばらばらのがい骨……276
（九）地図が見つかる……280
（十）フレンチ・デンへのひっこし……284
（十一）ほら穴ぐらし……286
（十二）あやしいうなり声がする……291
（十三）冬ごもり……297
（十四）ゴードン探検隊……299

第二部　希望に生きぬく

（一）島のクリスマス……305
（二）ジャックの秘密……309
（三）湖上のできごと……313
（四）仲間割れ……320
（五）大事件起こる……325
（六）奇妙な空中偵察……330
（七）イバンズ現われる……336
（八）悪者退治……342
（九）チェアマン島よさようなら……347
読書ノート……354　栗岩英雄

監修（五十音順）
岡田　要　川端康成
浜田廣介

編集委員（五十音順）
石川　湧　今泉吉典　植田敏郎　串田孫一
阪本一郎　品川孝子　土家由岐雄　滑川道夫
福井研介　村山定男　彌吉光長

ブックデザイン
A・D　田辺　誠　ケース絵　赤坂　三好　駒宮　録郎　武部本一郎
カバー絵　赤坂　三好　古賀亜十夫　武部本一郎
谷　俊彦　梁川　剛一　輪島　清隆

にんじん

ルナール／原作　奈街三郎／文　輪島清隆／絵

赤毛でそばかすだらけの顔をした、にんじんと呼ばれる少年。

母親は、ほかのこどもたちよりも、少年にたいしてきびしく、意地悪くさえします。

それは、にんじんがみにくい少年だからでしょうか。

しかし、にんじんは楽天家で、いつもむじゃきで、心のやさしい少年です。

父親との心のふれあいをとおして、たくましく成長していく、にんじん少年と、家庭での愛情について考えてみましょう。

にわとり

ルピック夫人は、ある晩、オノリーヌばあさんが、また鳥小屋の戸を、しめわすれているのに気がついた。

窓から見れば、ちゃんとわかるのだ。広い中庭のずっとおくのほうで、あけっぱなしにされた戸が、四角に黒ずんで、やみの中にうきあがっている。

ルピック夫人は、三人の子どもの中で、いちばん上の男の子に声をかけた。

「フェリックス、鳥小屋の戸をしめてきておくれ。」

「ぼく、にわとりの世話なんかするために、ここにいるんじゃないよ。」

フェリックスは、ものぐさで、おくびょうだった。いつも、青い顔をしている少年だった。

「それじゃ、エルネスチーヌは、どう?」

「いやよ、わたし、こわくて、そんな……。」

兄のフェリックスも、姉のエルネスチーヌも、ほとんど顔もあげずに答えた。ふたりはテーブルにひじをついたまま、おでこをくっつけるようにして、本にむちゅうなのだ。

「そうそう、うっかりしてたわ。わたし、どうして気がつかなかったのかしら。」

ルピック夫人は、ひとりごとをいって、きゅうに声を高くした。

「にんじん、鳥小屋の戸をしめておいで。」

この母親は、末の子どもに、こんなあだなをつけていた。この子のかみは赤毛で、顔じゅう、そばかすだらけで、〝にんじん〟と呼びたくなるような、姿かっこうだった。

テーブルの下で、なにをするでもなく、うろうろしていたにんじんは、立ちあがりながら、おどおどしていた。

「おかあさん、ぼくだってこわいよ。」

鳥小屋までは、暗くて、遠いのだ。

「えっ、なんですって！　大きなくせに、そんなじょうだんをいうんじゃないよ。さ、早く行って、しめておいで。」

「そうよ、にんじんが勇かんなの、わかってるわ。まるで、おすのひつじみたいにね。」

姉のエルネスチーヌがおだてると、兄のフェリックスも調子を合わせてかせいする。

「そうだとも。こいつは、世の中にこわいものなしさ。」

ふたりのおだてにのって、にんじんはおもわず胸をそらした。こうまでいわれてやらなければ、男のはじである。にんじんは、じぶんのおくびょうな心と、戦わなければならなかった。

母親は、にんじんを勇気づけるために平手打ちをくわせる、とまでいいだした。

「だったら、あかりを見せてよ。」

と、にんじんはいった。

母親は、かたをすくめただけでとりあわない。兄ときたら、人をこばかにしたように、にやにやしている。だが、姉のエルネスチーヌだけは、ちょっぴり、かわいそうに思ったのだろう。ろうそくを取りあげて、ろうかのとっぱなまで、にんじんを送ってくれた。

「わたし、ここで、待っててあげるわ。」

しかし、エルネスチーヌもこわくなって、すぐにげだした。さっと夜風が吹いてきて、ろうそくのあかりを、消してしまったからである。

やみの中で、にんじんは、がたがたふるえだした。こしをうかせて、かかとを地面にめりこませている。

暗いことといったら、まるで二つの目が、めくらになったとしか思えない。

ときどき、北風が氷のシーツのように、にんじんを包んで、どこかへさらっていこうとする。

きつねか、それともおおかみが、指のあいだや、ほっぺたに、息を吹きかけるようなことはないか？

それなら、いっそのこと、頭をまえにつきだして、まっしぐらに、鳥小屋へかけだしたほうがましだ。そこには、かくれるところがあるからだ。

にんじんは、手さぐりで、戸のかぎを見つけた。そのもの音と足音が、にわとりたちをびっくりさせた。止まり木の上で鳴きさけびながら、大さわぎをはじめる。

「こら、静かにしろ、ぼくだよ。」

にんじんは戸をしめるが早いか、飛ぶようにかけだした。手にも足にも、羽がはえたようである。まもなく、もとの明るい、暖かい場所へもどってきた。息を、はあはあはずませながら、内心、得意でたまらない。ちょうど、雨とどろで重くなった服を、新しい軽いのと、取りかえたような気持ちである。

にんじんは、ほこらしげに胸をはって立ったまま、ほほえみをうかべている。みんなが口ぐちにほめてくれるのを、心まちに待っているのだ。危険は、もう過ぎさった。両親の顔色のどこかに、じぶんのことを心配してくれたあとが、残っていやしないか——と、それをさがしはじめた。

ところが、だれもかれも、そしらぬ顔をしている。

兄のフェリックスも、姉のエルネスチーヌも、さっきと同じように、むちゅうで本を読んでいる。母親のルピック夫人は、落ちつきはらった声で、こともなげにいった。

「にんじん、これからは毎晩、鳥小屋の戸をしめにいきなさいよ。」

犬のピラム

父親のルピック氏と、姉のエルネスチーヌは、ランプの下で、ひじをつきながら、ひとりは新聞を、ひとりは本を読んでいた。

母親は、編み物に余念がなく、兄のフェリックスは、ストーブで両足を暖めている。にんじんはと見れば、ゆかにこしをおろして、めずらしく、なにか考えごとにふけっている。

とつぜん、くつぬぐいの上で、ねむっていたはずの犬のピラムが、ゴロゴロとのどを鳴らしはじめた。

「うるさいっ。」

ルピック氏は犬をしかったが、ピラムは聞きいれない。いっそう、声をはりあげる。

「ばかっ。」

と、こんどはルピック夫人がどなった。

それでも、ピラムは、うなるのをやめない。やめるどころか、みんなが飛びあがるほど、もうれつな声でほえはじめた。

ルピック夫人は、胸に手をあてた。心配な心臓を、押えたのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com